

菩提の卷

前篇

祈	道	迷悟	自然	實感	世尊	佛壽	應化	龍樹	宗教	法身	衆生	轉依	五德	後篇	華嚴法界觀門
一	五	六	八	一〇	一一	一一	一五	一七	一八	二一	二二	二三	二四	二六	四〇

祈
(三)

いと尊き一の大ミオヤよひ アナタの御力と恩恵とに依りて活ける 私共を、アナタの聖意に契ふよき人となさしめ給へ。

(11)

知らざる處なく見ざる處なき大ミオヤよ。私共が知能を啓發し、徳器を成就し得る様に、御恵をたれて護らせ給へ。

(1111)

宇宙に獨りの尊き大ミオヤよ。世のすべての人々は、皆あなたの子供にして、私共は皆同胞なれば、兄弟相互に睦まじく親しむ様に守らせ給へ。

讃歌（神と云ふは大ミオヤの事又如來と云ふ）

明治天皇御製

朝あさな夕ゆふな御親みおやの神かみにいのるなり

我が國民を守りたまへと

眼に見へぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけれ

照憲皇太后御歌

ひとりのみおもふ心のよしあしを

照らしわくらむ天地の神

永遠えいゑんの生命せいめいと無限むげんの光明くわうみやうとに在あります如ごとく來きよ

賜^{たまは}る明^{あけ}き光^{ひかり}と清^{きよ}き空^{くう}氣^きと新^{あた}しき糧^{かて}とに依^よりて、今^{こん}日^{にち}の務^{つと}めを果^{はた}したる恩^{おん}徳^{とく}

感謝し奉る、亦如來の智慧と慈悲と美化の靈力により

と憐と罪なる我を憐み、智慧と慈悲と威力とを以て今日聖旨に仕へ奉ること

を得たるは偏ひとへに如來にょらんの加被かひき力りきなれば深く聖寵みめぐみを報謝ほうしゃし奉たてまつる。

O

大慈悲に在ます如來よ、今日此會に集へる我同胞は、渴きて泉を求むる如くに、如

來の聖寵を仰ぐ。
我は自ら信する所に於て我同胞に、聖旨より出でたる眞理を宣べ傳

ふ。願ねがくは如に來よよ、我心われこころ聞き愚おろかなる者ものなれば、如に來よの聖み意ねに違たがはざるよう加か被び力りきを垂たふ。

まち
 して護らせ玉へ。
 たよ
 如來よ、
 によらい
 此に集へる
 こし
 我同胞は、
 わがどうほう
 飢へて糧を
 かて もと
 求むる如くに、
 ごと
 眞理の食
 しんり しよく

を望む。
我は心恐に慧なく、
唯聖教を信じて、
すべての同胞に説明す。

顔かほくは如に來よの聖み意ぎに應かなふよう憐あはみれをたれて靈れい力りきを垂たれ玉たまへ。

我等が慈父よ、自身は現に是罪惡の凡夫、曠劫より已來常に没し常に流轉して、出

離の縁なきものなりと信ず。

又決定して深く信ず、如來は、此罪惡深重なる我が爲に、無盡の大悲誓願を以て、我を攝して、必ず救靈し玉ふことを。願くは如來よ、我が信心增長せんことを。

○

至心に無限の光と永遠の壽に在ます聖名に歸命し奉る。天地萬物を統べ一切を攝め給ふ最と尊き獨のミオヤよ、如來の在まさざる處なきが故に、今現に此に在ますことを信じて、一心に恭敬し奉つる。

如來の威力と恩寵とに依りて活き働らき靈化されつゝ在ることを得たる我は我身と意の總べてを捧げて仕へ奉らん。翼くは一に聖意に契ふ務を果すべき聖寵を垂れ給へ

道

孔夫子が天の命之を性と曰ふ。性に率ふ之を道と曰ふ。道は須臾も離るべからず。離るべきは道にあらず。天言はすして四時行はれ萬物成るは天の道なり。天に則つて行ふは人の道なり。聖人は天に則つて人の道を教ふ。

宇宙本然の大道あり、之を阿耨多羅三藐三菩提と曰ふ。即ち無上道、大道の義なり。此の無上の大道に則つて至善の極に達する道を釋迦は發見して之を佛道と名づく。

今所謂る道とは人の精神を眞善美の極致に向つて進趣するの行程を云ふ。

教育と云ひ、教化と云ひ、人の眞智に情に藝に眞善美に向上せしむるに外ならず。人心は殆し道心は微なりと。實に心欲の私てふものは危殆のものである。道心てふ眞なる善なるものは微である。危きものは益々危く、微なるものは日に微にして、終に可憐人生を闇黒と罪惡の中に葬られて了ふもの皆然らざるものなし。

四

是處に於て大に顧みる處あり。一の會を結んて是至妙なる道をたどりて眞善美の方面に向つて進むを目的として友と相會して道の友と名づく。月に會して共に研磨し修養し智に情に向上せん事を期す。

道の友よ、時には大に議論せよ。論戦せよ、然れども君子の爭たれ。小人の爭は習ふなかれ。

君子の爭は理性に出でて理に歸す。向上の機となる。小人の爭は闇黒にして顔を血に赅して感情にうつたふ如きは道に向上すべき君子のさくる處なり。

我敬する道の友よ。俱に進まむ。眞に善に美に。進み進みて極るなきは無上の大道なり。友よ。

迷悟

迷——三世輪廻十二因緣——無明、行、(過去二因)。識、名色、六入、觸、受、(現在五果)。愛取有(現在三因)。生老死(未來二果)。

生死輪廻は無明を以て首とす。無明の故に行を爲す。即ち善惡業に因つて即ち六道の業識となる是中有の位。次に名色胎に宿りし時、六入は六根かたちつくる。觸は出生したる時た、觸覺あるのみ。次に感覺作用あるを受と云ふ。成年の後は執着心發達するを取と爲す。次ぎに有とは一切自ら作る業によつて未來の果を生すべき因となる。次ぎに生れ、生れば老死あり、展轉して流轉す。

悟る入る道、念佛三昧 七覺支の圖

衆生が無明罪惡より救靈せられて成佛するの捷路は念佛三昧を宗とす。念佛三昧とは衆生心と佛心と合一して衆生の無明はれて靈に入る。

七覺支とは一、擇法、行者の心意を擇みて一ら如來に注ぎ。二、精進、勇猛專修。三、喜、如來心と相應せんに先ちて歡喜を感ず。四、輕安、意輕く自ら安穩を覺ゆ。五、定、正しく如來心と相應するとき神秘融合生佛一致。六、捨、定心久うして純

六

八
熱するときは自然任運に三昧と相應す。七、念、とは如來心が薰染し念念自ら如來心と相應す。斯の三昧によつて衆生心が佛心と相應す。

自然界と心靈界

宇宙は絶對なる大靈、即ち眞如なので、其相対的の顯現に二面に分らる。吾人が現に肉眼にて經驗し得る感覺の世界とまた心眼即ち直觀にて觀じらるる方とにて、前者を自然界と名づけ後者を心靈界と云ふ。斯二界は宗教にては最も重要な區域である。

世に科學と哲學との領分の境界等と云ふも斯の區分に外ならず。斯の二界は自然界を生死界または有爲界、染法界、穢土、或は娑婆界等の名あり。心靈界を涅槃界または無爲界、淨法界、淨土または常寂光等の名を以て表せられてゐる。

自然界は絶對より現出せられたる世界の上に立てる衆生の住する處、是吾人が天然のまゝに感じ得る、世界なので、宗教で衆生の此處に生存する目的は、或は衆生の惑と業によりて迷ひ出したる世界とも見え、亦より高等なる心靈界に進入すべき豫備の道場とも思はれる。是は宗教に入りて信仰を得る人の感想である。

斯の自然界の方面、天に無數の星晨が羅列して、大虚に邊際を知らず全宇宙と云ふ。地に一切の生物森々とし、其種類數ふべからず。之を衆生と云ふ。大にして天體に、また地上の生物に、空間的には因縁相依つて網の如くに連絡し、時間的には因果相關して、鎖の如くに繋り合ふ。

世界には成住壞空あり。太陽が星雲の状態より無數の時間を以て完全に成就して赫々たる威力を自己に屬する一切の星宿に及ぼす。地球は太陽より分産せられて無盡の時間を以て成就したる結果は、一切の生物を發生し太陽と地球とは因縁相依りて離るべからざる關係を以て、地には一切の生物を養育して、種々の無數の生物を産み育て、極りなく、世界には成住壞空として、無數の時間に成立てのち、諸の衆生を住せ

九

一〇
しむる時代と爲り、世界といへども有爲界の物、諸の生物を生成するの氣力失ふ、老衰して破壊せられざるを得ざる運命は免れぬ。壞はたれたるものは空劫に歸す。次にまた成住壞空して、永恒に操り替へて止まず。一切の生物には生ずれば須臾も（斷絶）

清淨は感覺美的心象

美術的表象によりて自己を靈界に逍遙するものを三昧美的表象と云ふ。

實感と美感の區別

實感とは美術的彫刻の聖像または畫像等を好古家等の鑑識的眼にて彫刻若しくは畫家の巧拙を鑑識する如きを云ふ。其彫刻若しくは繪畫の聖容を觀見して其の印象を心眼にうつして想を凝神する時は其の聖像に誘引せられて神を靈界に逍遙せしむ。音樂に於ても又然り。

想を實の地に入れ神を八の水にすみ、心水に清らけく潤はひてかぐはしく輕安我を覺えず涼しく觸るれば輕く平かに涼しく軟らかに味ふ時は美しく。（斷絶）

世尊

世の衆生は悉く闇黒の凡夫である。世尊は世の燈明なり。若し天に太陽なかりせば世は闇黒なる如く佛日世に出でますば衆生の心は闇黒である。

世尊世に出でて人類を導くに最高の理想なる眞理を教ふるなくば、唯卑近なる動物欲、眼の欲、耳の欲、口腹の欲に驅られ、終身肉の奴隸に成り、黄金に跪き、權威を追求し、名利を貪求し、他人の榮耀を羨み、自らの位置に誇り、闇黒の中に一生を擧る。釋尊は志想高く物表に出で、其志想の清きこと皎月の如く、高き理想は日輪の如く、王位を見ること土芥の如く、世榮に對して價值を求めず、無上の眞理を覺り、

一一

衆生が最尊ぶべき人生を茫々裡に葬り去るを見るに忍びず、自ら心靈の眼を開き無上の眞理を悟らしむ。一切衆生を靈の光明の中に攝め取り我衆生と共に無上の佛果を得、共に永遠の常樂を得、永しへに平和の安寧を得、理想の世界を心靈界に實現し、一切と共に常樂の智に眞善美の都を現じて共に安寧を得んと。

太子たりし時の一切の五欲を顧みず、榮花をも珍とせずして、只管高尚なる理想の境たる眞の如來の眞善美なる靈界を地上の衆生の精神界に建設し、一切の人類の精神をして現在を通じて永遠の靈妙界に導かんとの願望は胸に湧きたりき。

斯の如き高尚なる理想より見れば王位何かせん、金錢何かせん。世に超勝して尊き者は靈格、世に在つて尊き者王位、世間の國王の尊きは國の王位に即くが故に尊きも、若し王位を去りて個人と爲る時は絶對の尊位に非ず。之れ人間的の尊さなり。例せば彼の露國帝清國帝の如し、他も然り。釋尊は自ら王位を捨て一個の仙道士と爲て終に無上の覺位と爲つて、人中の尊、靈界の王、天中の天位と爲れり。世の王位を得ざれば自己の權威を以て人民を御する能はぬ。佛陀は王位を捨て、世界人類を靈的に威伏せしむる故に世尊たり。

奇特は超勝獨妙の義。佛陀は最高等なる理想、最奇妙にて世を超て高遠なり。釋尊の王位を棄てたるは超勝獨妙の靈位に就かんが爲なり。世の三軍の力を假りて國を爭奪すると其の撰を殊にす。太子若冠にして高く無上菩提の志を發し、宇宙最上の妙法を得て、一切智の光明普く十方三世を照して、一切衆生を無明長夜の中より救ひ出して永遠平和の光明に安せしめんとの理想の高尚なる、一切を一慈の光明に復活せしめんとの希望は實に遠大である。其の高尚なる理想遠大なる希望は已に成就して、正覺の光明は一切衆生の精神に復活せしむ。されば其の教化せられし佛徒の高尚なる理想は知るべし。

汝等は宇宙に最も尊き靈に活くべき佛子なり。靈の尊きを自重せよ、されば國王に禮せざれ、父母を禮せざれとは、國王は國に在て尊き位、父母は家に在て尊き者、此

等は尊むべし、然れ共靈の尊き如きに非ず。故に國王及び父母に敬禮せざれとは汝等が靈は宇宙に輝く無上靈の光に依て生れたる佛子なればなりと。されば佛滅後に百年の後印度に古今獨歩の大威德王あり阿育と名づく。初め婆羅門を信じて佛法を破滅せんと企畫したりしも、深く感ずる處ありて大に改悛して佛法の宣傳の外護を爲すこと甚だし。王は精神的に佛法の眞理は宇宙に輝く靈法なるを以て、靈に活ける佛徒の頭惱には世間に比ひ無き靈の存在を信認して、自ら王位の尊に在り乍ら、すべての沙門を拜すること最も嚴であつた。靈に充たされたる沙門は無我にして普通の我慢ある者と殊なる故に、王の敬禮を受けつとも毫も自ら誇る如き者はあらざりしと。

靈に活ける佛徒は超勝獨妙の靈を自尊すれども、毫も我慢の色なし。また他の一切の衆生を尊敬して禮拜す。釋迦の前世當不輕菩薩の時に貴賤貧富の隔なくすべてを禮し汝等當來皆當作佛と號して禮拜す。弊惡の輩還て瓦礫を以て投石する時は逃げ去て遠く其影に向つて尙も至心に敬禮して止まず。何故に惡性弊垢の輩にも尙禮拜するか。所以は是等現前は如何に弊惡なるも内心に潜める佛性は當來に於て作佛すべき靈性を信するが故に、現在の惡人たるを認めずして其佛性に向て禮拜すと。されば自己の靈性を自覺しては國王父母と雖も敢て禮を設けず。然れども一切靈性に伏在せる佛性に對しては現在のいかに弊惡なる漢に向つても禮拜せざるを得ぬと。世の顯官に諂ひ卑賤の輩に對しては傲慢に待する如きの卑賤なる俗情とは雲泥の懸隔あり。

佛 壽

佛如來は無量劫より已來常に此世界及び他の無量百千の世界に於て應化の佛身を現じて衆生を利導し、我此間に於て種々の名字の不同年紀の大小を説き、又は時ありて涅槃に入と云ひまた入らずと曰ひ、我少して出家し無上道を得たりと説けども、然も其實は成佛已來無量劫、但方便を以て衆生を教化し佛道に入らしめんが爲に、我は己身を説き、或は他身を説き、或は己事を示し或は他事を示すと雖も、説處は皆實に

して虚ならず。何となれば如來は實に三界の實相を知見し生死の若くは退若くは出あることなし。在世及滅度の者なし。實に非ず虚にあらず、同に非ず異に非ず、凡夫の三界を見るが如くならず、如來は如實に見玉ひ、衆生に種々の性と欲と分別とあるにより種々の因縁種々の法を説き以て諸の善を作さしむ。是の如く我成佛已來甚だ久遠壽命無量常住にして滅せず、衆生を度せんが爲に方便して滅度を示す、如來常住なりと聞けば薄俗の衆生憍恣の心を生じて五欲に著し惡道に墮せん。若し諸佛の世に遇かたしと聞かば必ず難遇の想を爲し佛を渴仰して善根を修せん。此故に如來は滅するなくして而も滅度すべしと曰ふ。如來は常に此念をなす。何を以てか衆生をして無上道に入りて佛身を成ずることを得しめんと。

凡そ諸佛世尊は衆生をして佛知見を開示し佛の正道に悟入せしめんが爲に此世に出現し玉ふ。諸佛如來は唯菩薩を教化す故に諸の所作有は常に一事の爲のみ。唯一佛乘を以て衆生をして佛と同じく一切種智を得しめんが爲、方便して佛乘を分つて三と説く。

應化

教主釋迦牟尼佛陀は、無量光壽尊を本地とす。娑婆を度せんが爲に身を應化し八相成佛して衆生を度す。唯彌陀大本願海を説き、彌陀本願の光明を證り、無明黑暗の衆生をして光明名號を以て大涅槃を證せしむ。若し人光明威神の功德を聞き能く一念慶喜心を發せば、煩惱を斷せずして涅槃、即ち凡聖五乘齊しく智海に歸入すれば衆生悉く一味なるが如し。

彌陀涅槃界に(隨)緣雜善惡くば生じ難し。如來攝取の光明名號を()、一心不亂專執の即ち如來現前すべし。攝取光明常念佛の人を攝す。衆生無明貪瞋の雲に覆はれたるも光明不思議の名に

所有衆生光明名號を聞て信心歡喜して乃至一念至心に回向して彼國に生ぜんと

願へば、即ち往生を得て不退轉に住せん。

彼國に生ぜんに胎生と化生とあり。若し衆生ありて唯自己の罪福因果の理を信じてもろくの善本を修習すれども、佛智不思議を信了せず、五智に於て疑惑して信ぜざるものは、即ち胎生すと。衆生ありて佛智乃至勝智を信じて諸の功德を修して信心回向せば、七寶の華中に自然に化生して身相光明智慧功德は諸の(はさつ)の如くに具足し成就せん。

攝取光明

獲信見ては敬ひ大に慶喜すべし。即ち横に五惡趣を超ゆ。()念佛即是人中芬陀利華觀音勢至即其勝友となると。

龍樹大士等

龍樹大士 大乘中()佛陀豫言し玉ふ、南天竺大士あり。能有無の見を摧破し、大乘無上の法を宣揚して歡喜地に(住)して安樂に生ず。

佛教難易二道あり。難行は陸路の苦。信樂の易行は水道の樂の如し。彌陀佛本願を憶念すれば、自然に即時に定(慧)に入る。唯能く如來の聖名を稱へて()し大悲弘誓の恩を報じ()

天親菩薩は初め小乘を學び、後に大乘に歸したる宗師。往生論を造りて願生偈を造り、五念門を以て淨土の門を開く。歸命盡十方無碍光、至誠心に禮拜し新らしき願を捧げて如來の光明を讃頌し、専ら聖旨の顯れと靈國の格らんことを作願し冥想觀念によりて廣く淨土の依正二報の妙莊嚴を觀見し、略には二十九種の莊嚴は法身の一に歸するが故に、

回向によりて願功德大寶海に歸入すれば必ず大會衆數に入る。蓮華藏世界に至りて即ち眞如法性の身を證し、煩惱林に遊んで神通を現はし生死の國に入て應化を示す。曇鸞大師四論、梁(帝)常()處に(向)て菩薩()禮し、流支三藏に遇て淨教を慕く。

仙經を焚燒して淨教に歸す。

天親彌陀讃を造つて如來の聖德を頌む。天親往生論の註解

光明名號如實信知無明破れて如來心と相應すること

彌陀三願を以て衆生を化す、至心信樂往生の因、一生補處必至滅度往生の結果、往

相は願作、佛心即ち往相、廣度生は即ち還相、正定の因（信心、凡夫信心發すれば

生死即涅槃と證知す、必ず無量光明土、諸有衆生となり變化す。

善導

光明名號攝化十方。念佛衆生三緣あり、佛心と相應す。彌陀智願海に入行者金剛

心、慶發一念相應後、常（住）と等しく三忍を獲、即ち法性常樂を證す。

源空大師數十年、一代佛教、選擇本願、勝易二義

名號は是萬德所歸、四智三身內證外用、悉く體を擧て名に表す。

名體不離の名號を體得するに、如來の光明によりて衆生心を攝化す。心に念佛して

佛を離れず、內心光明を發して、即ち（往生）せん。

宗教の意義

宗教の意義とは一言に云はば神と人との合一にあり。神は全宇宙唯一の絶対的偉大なるもの、人とは神に對せば無智無力なるもの、偉大なる神の力によりて救靈せらるるは宗教の意義なり。人は神より稟たる靈性と肉我につきての煩惱との二性あり。

人には無明と罪惡と苦惱とは必然に具せり。之を救靈して明と善と樂とに救ひ玉ふは即ち神の心光なり。

人は無明とは、人は自ら知ありと謂へり。然れども生の從來する處、死の趣向する處を知らず、冥より出でて冥に入る、豈冥にあらずや。是無明の人生に對して真理の

光明を與ふるものは神の心光なり。

人生苦惱多し、老病死愛憎逆順の中に身にも心にも苦惱煩悶多し。斯る人生に大安慰の光を與ふるものは即ち如來なり。

人は肉慾我慾の主我自分勝手よりして、諸の煩惱罪惡を集めて心意とし、肉我の奴隸となりて自ら三惡道に墮落す。之に意志を靈化して人格を高等にみちびくものは、如來の心からなり。

此無明罪惡と苦惱の中より救靈して精神を明と正善と平和とに復し玉ふものは如來なり。

如來は絶対的偉大なるものにして、一切を救靈し自己の光明に攝取しすべてを攝取同化し玉ふ。

法身

法身とは、宇宙萬物の本體、一切萬法の依りて生ずる所。宇宙は絶対無限なり即ち是法佛の身心なり。宇宙全體を大なる（佛）として大日と名く。金剛界とは宇宙精神。胎藏界とは地水火風空の物質。宇宙の物質と精神とを合して之を金胎不二の大日と名づく。然らば即ち宇宙は外觀は物質の存在の如くなるも内は即ち心靈に充さるものとす。

法身は一切萬法の根底にして、また萬法は之に統一せられ、法身は始もなく終りもなし。

衆生心

宇宙一大精神の一分子たる個々の心即ち原始生物より乃至人類に至るまでの精神中に就て、人の心は法身の一分子なれば之を小大日とも云ひ、また小法身小造化なり。この小法身たる生物の身心は、本能に於て十界何にも成り得べき性能が本來具足して、

因縁に順て十界の中何れにか造り成すものなり。

一心の迷悟。迷に三善三惡二道あり。悟に小中大の三聖あり。迷とは本心の光明明開ならず、無明によりて自ら善惡ともに上中下の三等あり。三惡といふ。

轉 依

衆生性即ち分別性の吾人の天性は本如來藏心を根底とするも、世界の依地因縁に規定せられて成じ、衆生性頼耶は業識として生理的に身心を成して、人間としては人間に相應して此自然萬有を皆人界の物として認む。

頼耶を我とし自他分別し、五官四支生理的心理的に認むる世界は自然科学者の認むる如くに我も之を認め、而して人生を依止する所は此世界自然界にありとす。人々の運命もすべてを自然に一任せば足れりと信じ、また吾人天性には全く此五官と五官を支宰する自我を常識を以て認識するに他に道あるを信せず。是れは人生の自然にして敢て咎むるに及ばざる如し。然れども吾人の精神の奥に伏藏する靈性は是にて満足すべきものにあらず。尙進んで高等なる方處に向て自己の依止する所を求む。自己に生理的天性よりは高等なる靈性ありて、より劣等なる我を制裁しまた高尚なる理想を以て自我の依止する處を要求す。

人の天性は頼耶にして自然界に依止す。一步進みたる靈性は相待なる世界依止を超えて高等に絶對なる神に依止せんことを求むるも是法爾の理なり。

自我の依屬するを轉するを轉依とす。相待規定の生理的我は天性世界を所依とす伏在せる靈性顯發せんとすれば本靈性は因縁より成りし性にあらざれば自己の第一義の實性を性とする我なれば絶對無規定の實性に依屬を求むるは理の自然なり。

唯識に生理的我を頼耶とし、我に屬する生理心理學上のすべてを頼耶に屬する七識とす。自己が變現したる相分の世界現象とまた主觀なる精神とを以て實と執するなれども、こは依他性なれば永遠常住の安住所にあらず。絶對常住の安心を求めんには

圓實性の方に求むべし。

然る時は頼耶の我と及び七識は轉じて大圓鏡智等の四智と成るべし。識が轉じて智となる。

今世界依屬を轉じて絶對なる神の性に依屬すとは是唯識に所謂轉依なり。但し唯識は頼耶と智、衆生と如來とは本來同一性なるをゆるさず、衆生根底の頼耶新たに轉じて四智となる。

今は本來絶對なる實性即ち如來本覺智より分出したる頼耶我なれば自己の奥なる真我顯るれば如來四智となる。その異點は權實の教を異にす所以なり。

五 德

先に釋尊の麗しき相好淨らけき血色威嚴ある光顔と相貌の上に表はれたるは生理的にして期の如き形體姿色の上に現はるるは其内の生活なる釋尊の精神に其根據なくてはならぬ。それが即ち「明淨鏡」の影が表裏に暢ると「表に現はるゝは裏に根底の存する所以、五德はその内の生活の德なりとす。

一、今日世尊住奇特法

釋尊の精神内面質を充實せしめ成就せしむる原動力は矢張り日光に反映せる満月と同じく彌陀の靈力が釋尊の精神に實現せるに外ならぬ。釋尊の精神は彌陀の靈的顯現である。

如來、如來清淨光明が、世尊の感覺に顯現し、六根常に清らけく、奇特の力と現はる。

如來の清淨光が釋尊の六根淨と現はるるに二面あり。一方には六根清淨となりて自らの身心を莊嚴す。一面には神變無方、種々の奇蹟を現して衆生濟度の功用を爲す。六根清淨に六根とは眼耳鼻舌身意、此六根が如來の三昧に依つて精練し、自己の身心が如來の器と爲る時は六根清淨皎潔なるを致す。例へば寶石能く琢磨して光輝を放

つ如くに六根内外共に清淨と爲つて奇特を爲すことを得。六根清淨に具さに云へば五位あり。奇瑞とは釋尊が初め三迦葉を度し玉ひし如く、神變不思議を現す如し。他の例を挙げれば基督が一のばんを五千人に與へて尙餘りあり。其他種々奇蹟あり。聖法然が九條殿下の邸にて橋を渡る時に足地を離れること尺餘、頭より光明を放つと、是等は三昧發得の上の得たる處の効力なり。

二、今日世雄住諸佛所住

釋尊が一切の雄者よりも勝れて最も雄なる所以は最大なる彌陀大我に安住し玉ひしによる。

釋尊を世の雄と號くる所以は世には三軍を叱咤せば爲に震動せしむる程の豪傑も肉の情欲の爲には自ら耐ゆる能はざるあり。經に帝釋の天が有ゆる大修羅軍を征服する勢力も天女の色欲の爲には制する力を失ふ。然るに釋尊は第六天の魔女が天上天下に比類なき美容を以て有ゆる妖媚力を盡せども毫も世尊の情を動かすこと能はざりき。

また第六天が十八億の魔軍を以て有ゆる暴力百雷を一時に押寄せ天柱挫け地軸折るる勢力を以て威伏せんと欲すれども又毫も世尊の心は動かすこと能はざりき。

またいかに國王其他のあらゆる豪族が言を盡し語を盡して稱譽するも敢て歡ばず、また提婆調達の輩が如何に罵詈謗訕し乃至木槍を以て傷はんとするも毫も驚動したまはず。いかにして世尊は心動じ玉はぬかとなれば、最大なる彌陀大我の中に安住し給へばなり。

諸佛所住 心靈生活

たとへば人の身體の生活には衣食住が無くてはならぬ如くに、心靈の生活にもそれに比較すべき資料の必要あり。

靈の食

世尊は彌陀甘露の妙味を飽くまでに享受したまへば、靈に飢ゆることなく法身慧命豊富なり。されば一食の力億萬千劫に飢えず甯れざるなり。

靈の糧に二種あり。法喜と二に禪悅とす。二者共に如來の靈に復活したる人の靈の糧である。法喜とは已に靈に活ける人は如來の靈活の氣を受けて心廣く隨肝かに靈的氣分が内容満ちてえも云はれぬ快感妙樂、極りなきを感せんことなり。斯る靈的快感は靈の生命を養ふの糧なり。

禪悅とは亦三昧樂とも云ふ。三昧定中に於て感すべき靈的妙樂なり。人三昧に入つて漸々に覺觀の想念が静まり、湛然として水澄む如く、三昧中の歡喜の靈感あり。そが漸く進むに隨て身心共に融液し身心あるを忘れ安樂不可思議なり。之が深く入るに身心すべてを忘れ自然の妙樂任運にして靈感極りなきを捨と云ふ。是三昧樂の喜と樂と捨との三受とす。されば三昧に入る人は常恒に法悅と禪悅とを糧として法身慧命を養ふ。是等を靈の食とす。

靈の衣

世尊及び諸の聖人達は心靈に諸の珍妙の衣服璽瑠を被て其靈格を莊嚴す。故に其品性も最立派である。心靈に被る衣に種々あり。應法の妙服自然に身に在りとは、其聖人達は心が妙法に應ふて思ふ可からざることを想はず言ふ可からざるを言はず爲すべからざるを爲さず、言語動作が如法に隨順して毫も非法と非禮とがない。故に其の精神内容が如何なる人の前にも恥づることがない。即ち心に疚しからずば千萬人と雖も我往かんと云ふ如き立派な服を心に莊嚴して居る。私慾や虚飾垢穢を去つて天真爛漫たる人は正直に、心意は實に清淨無垢なる衣服にして直心にすべての潔白清廉なるは垢なき服である。之を以て衣とする人は何人に對しても恥づることはない。

また諸の聖人たちは柔和忍辱の衣服を心に纏ふ。例へば鎧を着て陣中に入れば矢も牟も射通さぬ如く、忍辱の鎧を着る時はたとひ惡人の罵詈の矢も通らざる故に、忿瞋の心を生ぜず還て彼等を哀れんで方便して彼等を救はんとす。また聖人たちは慈悲、歡喜、正義、安忍、剛毅、謙遜、眞實、清廉等の諸の德義はその品性を飭るの璽瑠とす。彼等は斯の如きの德を以て法身を莊嚴す。故に品性最も立派なり。

靈の室

人は衣食と共に其住居なくてはならぬ如く、靈の室なくてはならぬ。縱令身は金殿玉樓に住居するも心靈の住處の備なき者は慄れむべき乞食なり。

聖人達は何なる處に精神が安住すべき。世のすべての人は其の心が常に見聞觸知視れば見る處、聞けば聲に、五塵五欲の境に執着して境に奪はれ五塵を追求して五欲の奴隸となりまた位置財産などを追求して暫くも心の安する處なく、終身心が三毒五欲に使役せられて遂に六道に輪廻す。精神の安住する根底が定まらぬ者を佛教では六道輪廻の業を爲す人とす。

彌陀は宇宙全體を我とする大我なり。此彌陀の大我を明に自己の安住處として其上は彌陀は報身として一切の萬善萬行波羅密を以て莊嚴したる清淨國土に安住す。我等も彌陀の中に安住する心は大光明殿無量の莊嚴する處に安住するなり。若しも眼に見えは彌陀の在ます處は即ち蓮華藏世界無量功德が莊嚴する處たとひ眼に見えざるも此土に在り乍ら神は彌陀の淨土大光明中に住するなり。釋尊の神の住する處、釋尊佛眼開きて見玉ふ。我等は見ざれども釋尊と同じく神は彌陀の中に安住す。是が正しく安心の定まりたる人とす。釋尊が彌陀に依つて靈の衣食住を以て靈的生活したるが如くに我等も彌陀に靈育せられてますます發育し向上的に精神の生活を営み、姿色清淨なるも内面に此榮養分を得ればなり。

三、今日世眼住導師行

釋尊は彌陀智慧の日光の中に佛慧の知見を開きて一切種智を以て一切の眞理を照見し玉ふが故に衆生を導きて無上正覺大涅槃の都に引導し玉ふ。

釋尊は世の眼と名づくるは一切世間の人類は悉く心靈の眼目で如實に眞理を知見すること出来ぬ。宇宙の本體もまた人生の歸趣も、世間の因果出世間の因果等を了々と知見する眼なし。世間の因果とは衆生が上下の善惡の因に依て三善三惡六道苦樂の果を受ける理趣を諳かに見て惡を止め善に進ましめ、また出世間の因果とは無漏の聖道を

三十七道品あり。之の道を諳に行へば無漏の聖果として成佛出来る。衆生が菩提の正道を行へば諸佛と等しく無上正覺を得て涅槃の常樂に歸り完全圓滿なる靈格とし永遠の生命常住安樂の境に登ることなり。

若し釋尊出世せば種々の妄見に墮して永く苦界に沈淪して出ること能はざるべし。

衆生が俗に云ふ靈魂觀未來觀等は其の本開きが故に種々の邪見妄見に墮つ。之を見思の惑とす。見惑とは十見あり、身見とは此身是れ全體我である。身と靈魂とは本來一體である故、最此高妙に進みたるは今日の唯物論者の見解である。即ち人の靈魂と此生理的の身體の生理的の機能を離れて別に靈魂なる物在るに非ず。一體人の生命を構成する原形質は物質の精氣あり之が最も元始なるは電氣である。一の陽電子に數多の陰電子が聚合して最も精妙なる物を原子と云ふ。此原子が聚合したる物を原形質とす。此原形質が親より子に遺傳して生物の生命となるので、物質精明なる原形質の外に靈魂あるに非ず。身體全體同一の生命なりと考ふ。此等を身見と爲す。

邊見とは斷常の二見として斷見とは人死すれば全く火の消えたる如く全く消滅して斷滅すと認む。常見とは人の靈魂は凡ての生物の靈魂本來一定して人と畜類とは本各別にしてたとひ生を終るとも身を改むるとも靈魂は永く定まつて變るものにあらずものと認む。

邪見とは善惡因果を撥無し無漏聖道を修して成佛すべきことを排斥する邪見とす。

取見とは先入主となりし僻見、例へば人の精神には自然に何等かの一の靈魂觀の如きが「たゞ」腦裏に印象する時は其が主と爲つて飽くまでに固執して甚だ難き難き習性を作る之を取見とす。

戒禁取見とは非道を道とする迷信なり。

導師の要は大乘佛教にては一切衆生の佛知見を開示して佛の正道に悟入せしむるにありと。即ち衆生には佛性として其人の奥底に伏藏せる靈性あり之を開示して一切種智

を得、無上正覺を得、常住の平和永遠の生命なる大涅槃を得せしむるなり。之を宗教的に云はば衆生は本彌陀の子なれば無量光に靈育せられて圓滿なる人格と爲り永恒常樂の無量壽國に歸趣するを目的とす。

四、今日世英住最勝道

釋尊が彌陀の不斷光によりて道德的意志靈化せられたる意念にして無上の道德的行爲を爲すことを明にす。

釋尊を世英と云ふ事は世界一切聖中の英傑偉人中の最英たるの謂である。有ゆる人類世界の聖人中に於て最圓滿なる完全なる聖人である。身を王家に受けたれども一には人生の闇黒を破りて人の光明を發見して永遠の生命に導かんが爲めに、一には圓滿なる人類の道德的根據を發見し絶對的に價値ある道德律を建設せんとす。其故は釋尊已前の道德は其根底が民族的道德なり。印度人は波羅門より出でたる種族にして道德は斯民族内に於て行はるべし其已外の人類は祖先以來神との血縁なき故に道德も宗教も行はるる範圍にあらずと。然るに釋尊は正覺の知見を開き宇宙の最根本より宗教道德を發見し一切の人類は其根底悉く同一の宇宙最根底なる法身より出でたるを以て平等に一切は成佛し得ると。平等慈悲は人類のみに止まらず一切の生物にも及すべし。宇宙大道を道とする道德律を無上道心とす。此無上道心より出づる道德的行爲を以て一切の生物と同一仁慈向上の終局は同一平等の正覺位に至る。斯道德律は宇宙の大法則より出でて宇宙の中心たる至善圓滿なる無上佛果に進趣すべき至高至大の道德なり。彼の獨のグントが道德の動機を四階に立て、一、社會に裁せらるる道德即ち若し不正なる行爲あらば他人の信用を失ふ故に利害上にも得失より打算したる道德の動機は最下位にて、他に教へられたるまゝの道德は二にて、全く自己の良心より出たるのは其の上にて、最高等なる理想の標準から出づる道德心は第一格であると。佛教に於ても人道的道德また二乗の道德、何れも全の道德にて無上菩提心宇宙人道的心を心とする道德心が最高等の動機なる道德とす。無上菩提から出る道德心は全く私

を離れ、公平無私公明正大神聖正義なる如來の聖意が我道德の理想として顯現する道德心である。故に此道德的主體を世英とし此道德を根底とする道心を最勝道とす。

五、今日天尊行如來德

斯文は萬德圓滿なる彌陀の萬德が天尊即ち釋尊の靈的人格として最完全圓滿なる人格として身の行爲と口の言語と意の思想を以て生涯に亘りて最も道德的健全なる行爲を以て實現し玉ふことを明す。

彌陀は靈界の太陽である。例へば太陽の一切生物の生活の原動力たる如し。釋尊は天尊と云ふは天中天とも云ふ。天とは印度人の最も尊ぶ梵天をさす。彼等の尊者の中

の最勝なる者即ち靈的の天尊といふ意味である。天尊なる釋迦が如來の德を行すとは即ち彌陀の萬德を以て釋尊の身心に實現することとなり。如來は神聖にして道德の最高中心である正義である。無上道に向上すべき行爲を命す。

如來は神聖にして一切の無上道德命令の權威たる皇王である。萬有は此命令の下に行はる。一切諸佛神明を統一する最高者たり。道德的行爲の終局的歸趣する處である一切の道德行爲の向上の結歸は已上の圓滿なる德に歸す。彌陀は一切衆生の大慈悲の父、一切衆生の心靈を開發し靈に復活せしめ一切諸佛と等しく成佛せしむる父である釋尊は彌陀の人格現にして一切を教化して唯一の最高たる彌陀に歸命せしめ唯一の慈父たる彌陀の許に歸らしむ。一代五十年に亘り哲學的には釋尊は自覺して他を覺せしめる大哲人たると共に大宗教育家としての釋尊はナザレの基督が天の父に於けるが如くに無量光如來の大威神大慈悲の光明を仰ぎて自ら模範として一切衆生が彌陀の聖意を我意とし此身心は聖意を實現すべき器なることを示し玉へり。

若し釋尊が圓滿月なれば吾人は纖月より次第に増長すべき月なるを信じて分に應じて如來の靈光を我心身に依て實現せんことを願望とせん。

華嚴法界觀門

真心即ち一切を統一せる一眞法界は總じて萬有を該ね即是一心。然るに心體萬有を融して即ち四種法界と成る。

- 一、事法界（界は分の義、一々分齊差別あるが故に）
 - 二、理法界（界とは性の義、無盡事法本同一性の故に）
 - 三、理事無碍法界（同一の本性と差別事物と無碍の故に）
 - 四、事々無碍法界（一切差別の事法、一々如性融通重々無盡の故に）
- 法界觀三門

- 1 真空 2 理事無碍 3 事々無碍

（一）真空觀。低度なる理論的意識より漸次に進歩發達し、また低度の意識の執を排斥してまた本質を覆ふ所の種々の素質を除きて終に本體を顯示す。

真空とは是實體即ち精神一元理體。天然の意識妄念慮に非るが故に眞と云ひ、物質に簡んで空と云ふ。實體の本質なる絶對精神なり。

第一會色歸空（色とは現象態の物心二質、空とは本體即ち眞心態）

- 1 色不即空以即空故。

此顯動態は外道や二乗が執する如く斷滅の空に歸するものにあらず、外道はこの色心は終には大虛に歸すと。二乗は形は苦の本、智は雜毒なり。この身を無にし無意識が涅槃なりと。今はそのやうな斷空に非ず。今いふ色は妙有の色なれば、色には本體別にあらざれば、畢に眞心に歸すべき理性あり。

- 2 色不即空以即空故。

凡夫や初心の菩薩の執する處の物心の二現象が即ち空の本體に非ず。是に三義あり。一、空は無邊際義（無限の本體と有限の現象をば別體、色法は有限にして本體は無限なり。

二、無壞義（本體は無壞にして色法は規定の爲に、緣離れば離散す）

三、無雜義（本體は純粹眞心質にして色法は混雜質にして本體は爾らず）

此の三義を以て實體と顯動態とは簡別せざるべからず。然れども此の現象態は實體を離れては本質あるものに非ず。實體の現象の色なれば色が本體なり。

- 3 色不即空以即空故。

色は人の五陰、六根、六識、六塵、十二入、十八界、十二因緣、四諦、乃至佛一切種智に至るまで、若しくは物と心との二現象となりし上は、實體には非ず。故に不即空。然れども實體を別にして本質あらざれば即ち空と云ふ。

4 色即空 顯動は依他にして實性なし。無性即ち圓成の本性が現象に外ならず。六道衆生及び十方佛菩薩一切色法即實體を離れて本質あるに非ず。

第二空即色觀（空は實體、色は現象、色は物心二質）

1 空不即色以空即色故。——外道や二乗が執する斷滅の空にては現象界の本體とは云ふべからず。真空は妙有の本體なり。

2 空不即色空即色故。——空理は青黃等とはいふべからず、現象に非ず。然れども現象は實體を離れたるに非ず。

3 空不即色空即色故。——本體は所依にして他に依屬せず。現象は本體に依屬す。故に態異。能依所依一體故即と。

4 空即是色。——實體と現象とは本一元理なり。眞如自性を守らずして現象界に出たるが故に。

第三空色無碍觀

物心二現象は深く觀じ來れば本體あるに非ず。同一本質の現象なるが故に外道二乗の如くに斷空に非ず。真空の客體が色の現象なれば、色を盡さざれば真空顯はるるに非ず。故に菩薩は此の顯動界と同時に實體とは表裏の二方面を同時に觀念す。

第四泯絕無寄觀

實體は現象と云ふ可からず。實體が現象なりとせば天然教と偕に凡聖同見と成る。二態全く異らば凡聖永く隔り凡は聖と成るを得ず。即と云ふも離と云ふも眞理を失ふ。絶對本質即ち眞理は非時間非空間非一切法非物心非活動。絶對無寄、般若現前、言語道斷、心行所滅、智を以て知るべからず、唯證のみあつて相應、心境冥合、冥心は智を遣る。方に茲に詣つて境明かに唯だ行のみ到るべし、解の境に非るが故に。冥合するは眞行、行即境。心動念すれば法體に乖き、正念を失ふが故に。真空理性本自如然。情亡智泯、是本眞。

(二) 理事無碍觀

前已に一切の妄情を排除して、本眞即ち絶對眞心本質を顯示し、未だ眞如の妙用を顯はさず。本體には妙用あり。理の本體と事の妙用とは炳然雙融。本體に屬する活動なれば互融鎔、互に徧す。十門あり。

二門互融 互徧 存亡 逆順

1 理徧於事門。——能徧の理絶對、所徧の事個々差別、淨染互緣起を爲す。一切起滅の事相は理體を離れたるものに非ず。法性一切處一切事に徧せざるなし。

2 事徧於理門。——能徧の事物は分限あり。分限の事物は無限の理體に依らざる可からず。事は本體なきが故に事物の顯動の自中存在の本體を觀すべし。

3 依理成事門。——顯動の事物に別に本體なし。實體によつて成ることを得。依他緣起に自性なきが故に。眞如隨緣の故に。波の水に依て立つが如く、如來藏に依るが故に生死あり。如來藏に依るが故に涅槃あり。

4 事能顯理門。——影像が鏡明を表はす如く、識智が本性を表はす。信論に、無明に因つて眞覺とすと。事相の虚妄なくば眞理なるもの有ることなし。相待によつて絶對を顯はす。

5 理奪事門。——波は悉く水なりとすれば水の外に波なきが故に本體の外の顯動なし。

6 事能歸理門。——眞理隨緣成事。法身五道に流轉するを名づけて衆生と曰ふ。天然教天然の人は十方界唯顯動のみ見て本體を見ず。

7 眞理即事門。——眞理に即したる事に非ずば解脫の能なし。顯動態を離れて眞理即ち本體を求むべからず。小乘外道の超然主義の如く顯動を捨て超然界に本體を求む可からず、顯動の自中存在なり。

8 事法即理門。——顯動には本性なし。衆體即眞の故に衆生滅して眞顯はるるに非ず。

9 眞理非事門。——實體は顯動態に非ず。波と水とが異なる如し。眞妄と同一ならば解脫の要なきに至る。

10 事法非理門。——實體と顯動とは二質異なるが故に事法即眞理ならばまた解脫の要なきに至る。

(三) 周徧容含事々無碍觀

一々の事皆如理の故に融通なり。然るに單に事相のみに約せば、彼此相碍も、本質に融通するが故に、相碍ることなるべし。

事如理融故十門無碍。

一切事々物々は表面より見れば個々別々の象と用とを現するも、其内面に不可割の理性に規定せらるるあり。故に理として融通すべし。五理とは調く、一、薄徧容含。二、交參。三、彼此涉入。四、自在。五、同時互爲能所。

1 理如事門。——眞理全く事々と爲が故に、現象の事物は本質眞理の故に、表裏一體の故に、

2 事如理門。——一々物事は内面不可割に無限にして空間と時間に徧する實體との關係。

3 事含理門。——現象の事物が眞理と非一、故に一事に存して能く廣く容る。一微塵中に無盡の法界を容る。内面不可割の故に、俱に一微塵中に在て(理)す。

4 通局無碍門。——理と事とは非一即非異の故に、一切塵に徧入す。非異即非一の故に、全く十方に徧して一位を動せず。即ち遠きも即近きなり。

5 廣狹無碍門。——事と理とは非一即非異の故に、一塵を壞らずして能く廣く十方刹海を容る。非異即非一の故に廣く十方法界を容れて微塵も大ならず。

6 徧容無碍門。——一人が百人に寫象せらる。一塵を一切に望で(溥)徧即廣容

7 攝入無碍門。——一切を一法に望。一人の心に百人を寫象す。

8 交渉無碍門。——一切は一に入り、一は一切に入る、交渉無碍。

9 相互無碍門。——我に餘の數多を攝したるま、他の寫象中に在り、他がまた數多を攝したる寫象のまゝが自に入る。相互無碍と云ふ。

10 溥融無碍門。——一切及一も皆同時に更互に相望、前の九を融して展轉して相互的に一及び一切を出でずして互に相望、總別同時に重々無盡なり。

初め真空觀は、實體と現象とを分別と致一との兩方面を顯はし、本體より現出せられたる現象は、本體の自性に非ざれば、一々に之を排除して、終に其體は言語道斷、心行處滅、唯深く證入したる精神のみが致一冥合することを觀じ、

次に本體を離れたる顯動態なく、本體と顯動との關係を種々の方面より理論的に觀念すべきことを明にし、三に一切の事物は表面は孤立の如くなるも内面は不可割の同一の本體に關係せるが故に、事々物々は相互に融容交渉して無碍に融通すべき理性あることを觀す。

此三觀は本體と顯動との本體及性能には斯の如きの關係によつて分別し致一すべき理性あることを理論的に意識する觀門なり。

天台三觀

略して辨せば、

初め不思議の境を觀す。曰く一念の心を觀するに三千の性相百界千如を具足して滅

することなし、此境に即して即空即假即中なり。更に前後ならず。

一念の心とは現前の陰妄一刹那の心の根底が本性なり。故に此心性には種々の方面に展してまた種々の異様に變化すべき性能が具備せり。能に本體と性能とがあつて種々の性相に變化する理性は不可思議の妙用あり。

先づ之を觀せんには心の作用ならざるはなし。心の理性に善惡迷悟染淨に轉化すべき性能なり。十界とは六凡四聖なり。六凡とは善惡の二方面が各三等に分ちて六道と爲る。三惡道の惡の上品は地獄中は餓鬼下は畜生、又三善道の下は修羅中品は人間上品は天上界とす。此六道善惡等を殊にするも是天然の人にして高等なる宗教心機開展せざるが故に善惡共に迷なり。故に六凡と云ふ。次に四聖、超天然の宗教意識に三品あり。下は聲聞中は緣覺上の因は菩薩にして果は佛界なり。

十如。此十界の個々各々性相等の十法ありて身體と精神と國土とを受用す。

所謂十如とは、「相貌表に現るゝ相象と、裏面に自分不改の「性」格と、本「體」即ち主質と「力」用即ち活動力と、業即ち構造、即ち「作用」と、習「因」即ち豫地と、本因を助成する資「緣」と、習「果」即ち結果と、「報」應即ち報果と、初の相と後の報を末として歸趣する處を究竟等と爲す。

此の十法は下地獄の相と性より佛界に至る迄各々別々にして少しも同じからず。身と心との現象には各々異相なるも其内面の本質には異なることなき理性あり。故に本體即一の故に十界相互に轉變すべく、顯動の性相は各々別々の故に、自然任運に轉化すべきものに非ず。故に之十法界が理性具するが故に十界に變ず。法界緣起によるが故に因果律あり。